

幼児期の土粘土による粘土遊び

—鹿児島市内の幼稚園における実践研究—

A Research on Playing with Soil Clay in Early Childhood
— A Practice at a Kindergarten in Kagoshima City —

井上周一郎*・上園沙由里**

Shuichiro Inoue, Sayuri Uezono

*鹿児島女子短期大学 **附属なでしこ幼稚園

抄録：本研究では、幼児期の「土粘土による粘土遊び」の教育的意義を検証するために、鹿児島市内の幼稚園で実践研究を行った。その結果、幼児が自然素材である土粘土の触感や可塑性を味わえることで、粘土遊びに対する意識が変化することを確認した。また、大量の粘土に対して自由に関わることで、つくる意欲を高め、全身でのダイナミックな粘土遊びや塊を活かした作品づくり、共同遊びにつながるが示された。これらの成果と合わせ、粘土遊びにおけるアクティブ・ラーニングのための支援や環境設定についても考察を深められたことで、この取り組みの在り方と有効性が明らかになった。

Key words：土粘土 粘土遊び 幼児期

1. はじめに

近頃子どもたちは、昔に比べて、自然に接する機会が少ない。とりわけ、生活の中で土に触れることは無くなってきている、と言える。昨今、幼児教育の現場に何うと「土で描く」や「光る泥だんごづくり」、「泥んこ遊び」など、土に関わる活動が増えてきているように感じる。

このような状況において、筆者らが着目したのは「土粘土による粘土遊び」である。土粘土は、天然の土を混ぜ合わせてできているので、自然素材特有の感触が味わえるものである。子どもにとって親しみやすく、自由自在に変形するので好奇心を誘う素材である。また、とったり、つけたりが自由にできる可塑性があるうえ、粘着性を併せ持つことから、粘土遊びに適した教材といえるだろう。そのうえ、土粘土は他の粘土と比べて、安価で入手しやすいのもメリットである。子ども一人ひとりに十分な量を用意できるので、油粘土や紙粘土では体験できない塊を活かした造形にも取り組み、表現の幅を広げることになる。広いシートの上で活動できれば、全身でのダイナミックな粘土遊びにもつながり、独自の展開が期待できる。

前述のように「土粘土による粘土遊び」は、子どもにとって魅力的であり、心身の発達に影響を与えられ考えられる。そこで本学の短大生に対し、その活動に関する実態調査をしたところ、全体の7割ほどが体験した、と答えた。予想よりも高い割合であったものの、そのうちの5割程度が小学校での活動であり、幼稚園では1割程度であった。つまり、学生たちが幼児の頃は、ほとんど取り扱いがなかったことが浮き彫りとなった¹⁾。このことは、今日の幼稚園などを見ても同様で、その実践を目にすることは僅かである。様々な要因が考えられるが、まずは土粘土の取り扱い方に専門的な知識や経験を必要とすることから、敬遠されがちになることが挙げられる。また、指導者自身が土粘土を扱ったことがなく、どのように活動したらいいのかわからない、といった声も聞こえてくる。仮に、手引書のようなものがあれば、取り掛かりやすいと思われるがさほど多くはない。1976年発行の新井秀一郎著『塑造』では、塑造の活動がわかりやすく解説されているものの、主に児童期からの内容となっている。近年では、中川織江著『粘土遊びの心理学』において、土粘土に関する様々な実践研究がまとめてあり興味深い。幼児期の粘土遊びを考えるうえで示唆に富んでいるが、このような先行研究は、描画活動などの事例と比べると極めて少ない。

そこで、本研究では「土粘土による粘土遊び」を鹿児島市内の幼稚園で実践研究し、その結果を通して、幼児期における

教育的な意義や有効性を再度検証したいと考える。また、主体的な粘土遊びに導くための支援や環境設定を考察しつつ、その問題点や課題についても明らかにしていく。

2. 「土粘土による粘土遊び」の実践

1) 「土粘土による粘土遊び」の方法

本実践は、鹿児島女子短期大学の附属なでしこ幼稚園において「土粘土による粘土遊び」を行った。安全に活動できるスペースに広目のシート（サイズ：縦7.1×横7.1m 厚み：#3000）を敷き、そこに大量の土粘土を準備し、全身による自由な粘土遊びに取り組むことにした。

対象は、年長組から年少少組までの4組。年少組と年少少組は他の組に比べて園児数が少ないので合同が実践し、年長・年中組を含めた計3回で行った。事前準備として、特に注意したことは土粘土の柔らかさである。幼児の小さな手でも、扱える状態の粘土を準備するため、中川2)が本文中で述べている「粘土を耳たぶの固さに練りあげてから子どもに与えてほしい」を念頭にしっかりと水分調整をして練り上げた。そして次に、配慮したのは粘土の量である。この点についても、中川3)の「一人当たり、2キログラムが適量である」を参考にし、若干の余裕を持って一人当たり3キログラムに決めた。各回の園児数が約50名であったので毎回150キログラムの粘土を用意し、3カ所に置くこととした。あらかじめ、それらを分けてみると大した塊に見えなかったもので、其々のボリューム感が出るよう、バケツ（直径3.7×高さ4.5cm）を逆さまにしたものに粘土をくっつけて、山型の大きな塊をシート上につくり出した。それから、今回は床に敷くシートが粘土板の代わりになるため、粘土を置いた場合でも目障りにならずに落ち着いて取り組めるよう、灰色のシルバーシートを用意した。

このような環境設定は、子どもたちが全身を使って伸び伸びと粘土遊びに取り組めるように意図したことで、全ての回で同様にした。筆者らは前述の設定や準備を含め、指導案の内容についても関係の先生方と打ち合わせを行った。そのうえで、実際の活動にあたっては、通常どおりに以下の指導案に基づいて各クラスの担任をお願いをした。

2) 各組の指導案

各指導案は、当然ながら段階的な学びの内容があるので、重複する部分がある。其々の内容が途切れないよう、出来るだけ省かずに記載しているが、全く同じ語句については一部省略している。

◆年長組の指導案

平成27年4月23日（木）

鹿児島女子短期大学附属なでしこ幼稚園

4年保育 男児 5名 女児 5名

3年保育 男児 10名 女児 19名

2年保育 男児 5名 女児 5名

1年保育 男児 1名 女児 0名

計 50名

1 予想される幼児の活動

土粘土で遊ぶ。

2 幼児の姿

<既習経験>

○ これまでに年長組の幼児は、油粘土を使って遊んできた。油粘土での遊びを通して粘土の柔らかさや冷たさ、匂いなど様々なことに気付いてきた。また、粘土をちぎって、丸めたり伸ばしたり平たくしたりなど粘土の形が自由に変わったり、粘土同士がくっついたりすることに気付き、更に粘土遊びの面白さを感じてきた。

更に、初めは粘土を丸めたり伸ばしたりすることを楽しんでしたが、段々と出来たものを団子や蛇に見立てて遊ぶよう

幼児期の土粘土による粘土遊び

になった。遊ぶうちに様々な形の粘土を作り、組み合わせてケーキや恐竜など自分のイメージするものを作り出す楽しさを感じ始めているところである。

<配慮を要する幼児>

- 年長組の幼児の中には、汚れることに抵抗のある幼児がいる。(はな、そな) 幼児の様子を見ながら遊びに誘ったり、教師と一緒に遊んだりして幼児が汚れることを気にせずに遊ぶことが出来るようにしている。

3 本時

(1) ねらい

- 全身で土粘土に触れて遊ぶ事で、様々な感触を味わい、土粘土の面白さを知る。

(表現2-(5))

- ・ 油粘土との違いに気付く。(感触が違う事、無臭である事。)
- ・ 手や足を使って粘土の感触を楽しむ。
- ・ こねたり、丸めたり、伸ばしたり、くっつけたりして自分のイメージする物を作る。

(2) 活動について

- これまでに幼児が触れてきた油粘土は、冷えると固くなり、温めると柔らかくなる。その為、手で触れていくうちに粘土が手のぬくもりで温められて柔らかくなり、幼児の手の力でも簡単にちぎったり、丸めたり、伸ばしたり、くっつけたり、様々な形に変える事ができ幼児でも扱いやすい。また、管理がしやすいという利点がある。しかし、匂いが強く、手に着いた匂いは落ちにくいという欠点もある。

一方、本時で使用する土粘土は、加える水の量で柔らかさを調整することができ、乾燥させると固まり、水を加えて練るとまた柔らかくなり、水の量で粘土の硬さも変える事ができる。そして、油粘土との大きな違いは無臭だという事である。今回、幼児は初めて土粘土に触れるが、油粘土とは違う土粘土特有の感触を味わったり、匂いがない事にも気付いたりする中で、これまで以上に粘土に興味をもち、土粘土の面白さを知る事ができるだろう。また、普段は一人約750g程度の油粘土で遊んでいるが、一人約3kgの粘土を準備することで、手だけではなくダイナミックに全身で土粘土の感触を楽しみ、土粘土特有の性質に喜んだり、大きな物を作ったりする姿も期待したい。

また、粘土は一人でもじっくりと様々な遊び方をする事もできるが、友達の作品に目を向け刺激を受けたり、友達と感触や面白さを共感したりすることもできるため、個々でじっくり遊ぶだけでなく、友達の作品に目を向け真似たり、友達と一緒に同じ作品を作ったりする姿も期待できるであろう。

(3) 本日の展開

環境の構成	時間	予想される幼児の活動	教師の援助
<p><リズム室></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <div style="display: flex; justify-content: space-around; width: 100%;"> イ ア </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; width: 100%; margin-top: 10px;"> ア ア </div> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;"> ウ </div> </div>	10:20	<ul style="list-style-type: none"> ○ 汚れても良い服に着替える。 ○ 先生の周りに集まり、今日の活動について話を聞く。 ○ リズム室に移動する。 <p>◎ 土粘土で遊ぼう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 設定している土粘土を見る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全身を使って伸び伸びと遊ぶ事ができるように汚れても良い服に着替える。 ○ 話し方や話す際の表情などを工夫し、これからの活動への期待を高める事ができるようにする。 ○ 幼児が安全に遊ぶ事ができるように、床にシルバーシートを敷いたり、柔らかい粘土を準備したりする。 ○ リズム室に設定してある粘土を見てこれから始まる活動への期待を十分に高められるように、教師も喜びに共感する。 ○ 全員で一斉に土粘土に触れ、粘土の感触や匂い、冷たさなどを十分に味わう事がで

<p><準備物> ア 土粘土・バケツ イ シルバーシート ウ たらい</p> <p>○ タオル ○ 足ふきマット ○ 救急用具 ○ 保冷剤</p>	<p>11 : 20</p>	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-bottom: 10px;"> <p>○ 粘土に触れる。 ・ 表面に触る。 ・ 指で押す。 ・ 手で握る。 ・ 匂いをかぐ。 ・ 足で踏む。 ・ 手でたたく。 など。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-bottom: 10px;"> <p>○ 粘土で遊ぶ。 ・ こねる。 ・ ちぎる。 ・ 丸める。 ・ 伸ばす。 ・ 穴をあける。 ・ 転がす。 ・ くっつける。 ・ つなげる。 ・ 塊を積み重ねる。 ・ 好きな形を作る。 ・ 友達の作品を見る。 ・ 友達と一緒に作る。 など。</p> </div> <p>○ 教師の話を聞く。 ・ 友達の作品に目を向ける。 ・ 活動を振り返る。 ○ 粘土を片付ける。 ○ シャワー室へ移動する。 ・ 手や足を洗う。 ○ 保育室に戻り着替える。</p>	<p>きるように、教師も幼児の気付きを十分に受け止め共感する。</p> <p>○ 土粘土の感触や匂いなど油粘土との違いに気付けるように、幼児の気付きを周りの幼児にも紹介する。</p> <p>○ 土粘土の柔らかさや冷たさなどの心地良さや形を変える楽しさを十分に味わえるように、教師が率先して全身を使い粘土に触れる姿を見せる。</p> <p>○ こねる、ちぎる、丸めるなど様々な遊び方を楽しめるように、幼児の遊びを認めたり、教師も幼児と同じ遊び方で楽しんだりする。</p> <p>○ 普段の環境との違いなどから、粘土に触れる事へ抵抗を示す幼児へは、少しでも触れる事ができるように、幼児の様子を見守りながら誘い掛けたり、教師も一緒になって粘土に触れたりする。</p> <p>○ 土粘土で更に楽しく遊べるように、個々で遊び始める姿を見守り、様子に応じて教師も遊びに参加したり、新たな遊び方を提示したりする。</p> <p>○ 友達の作品に目を向けたり、友達と一緒に何かを作ったりして、友達との関わりも楽しみながら遊べるように、幼児の作品を周りに紹介したり、具体的に褒めたりする。</p> <p>○ 粘土の塊を高く積み重ねたり、長く並べるなど、普段の粘土遊びではできないダイナミックな遊びも楽しむ事ができるように、言葉かけを工夫する。</p> <p>○ たくさん遊んだ達成感を味わえるように、片付けも幼児と一緒にやる。</p> <p>○ 活動を振り返る際は、満足感を十分に味わう事ができるように、幼児から油粘土との違いや、どのような物を作ったかななどを引き出しながら話をする。</p>
---	----------------	---	---

◆年中組の指導案

平成27年6月17日（水）

鹿児島女子短期大学附属なでしこ幼稚園

4年保育	男児	6名	女児	5名
3年保育	男児	21名	女児	16名
2年保育	男児	1名	女児	3名
1年保育	男児	0名	女児	0名
				計 52名

1 予想される幼児の活動

土粘土で遊ぼう。

2 幼児の姿

<既習経験>

- これまでに年中組の幼児は、油粘土を使って遊んできた。油粘土での遊びを通して粘土の柔らかさや冷たさ、匂いなど様々なことに気付いてきた。長方形の形をした粘土の塊を曲げてトンネルの形を作ったり、端と端を繋げてドーナツの形を作ったりなど形が変わる面白さに気付いてきた。その後、粘土をちぎる、丸める、伸ばす、平たくする、など粘土の形が自由にならったり、形を変えた粘土同士を組み合わせたりすることができることに気づき、更に粘土遊びの面白さを感じてきた。

初めの頃は粘土を丸めたり伸ばしたりすることを楽しんでしたが、段々と出来たものを団子や蛇に見立てて遊ぶようになった。また、園内母の日では保護者と一緒に粘土を使って好きな物を作って遊ぶ中で、様々な形の粘土を作り、形を組み合わせてケーキや動物、好きな食べ物など自分のイメージするものを作り出す楽しさを感じることができた。その後の遊びの中でも粘土の形を自由に変えて、更に自分のイメージしたものを作る事ができるようになってきている。

<配慮を要する幼児>

- 年中組の幼児の中には、汚れることに抵抗があり長い時間遊び続けられない幼児がいる。(みまり・あかり・なな) 幼児の様子を見ながら遊びに誘ったり、教師と一緒に遊んだりして幼児が汚れることを気にせずに遊ぶことが出来るようにしている。

また初めての環境に戸惑い、遊び始めるまでに時間を要する幼児がいる。(みさき・はやと) 友達の遊びの様子を紹介したり、教師と一緒に遊びに加わったりして、幼児のペースを見守りながら遊び始められるように援助している。

3 本時

(1) ねらい

- 全身で土粘土に触れて、土粘土の特性に気付き楽しく遊ぶ。

(表現2-(1))

- ・ 土粘土の匂いや感触、色に気付く。
- ・ 手や足などを使って粘土の感触を楽しむ。
- ・ ちぎったり、丸めたり、伸ばしたり、くっつけたりして形が変わる面白さを味わう。

(2) 活動について

*年長組の内容と同様

◆年少・年少少組の指導案

平成27年6月30日（火）

鹿児島女子短期大学附属なでしこ幼稚園

4年保育 男児 3名 女児 5名

3年保育 男児 22名 女児 21名

計 51名

1 予想される幼児の活動

土粘土で遊ぼう。

2 幼児の姿

<既習経験>

- 年少組の幼児は約1ヶ月前から、油粘土で遊んできた。油粘土での遊びを通して粘土の柔らかさや冷たさ、匂いなど様々なことに気付いてきた。また、粘土をちぎって丸めたり、伸ばしたり、平たくしたりなど粘土の形が自由に変わる事を楽しんできた。他にも、粘土同士がくっつくことに気付き、更に粘土遊びの面白さを感じてきた。このように、粘土で繰り返し遊んでいく中で幼児なりに作品のイメージを持ち、団子や動物などを作る姿も見られるようになってきた。

なお、年少少組の幼児については、これまで油粘土に触れる経験が無く、粘土に触れるのは今回の土粘土の活動が初めてである。

<配慮を要する幼児>

- 年少組の幼児の中には、普段と違う場所や初めての活動の際に不安から涙を流す幼児がいる。本児にはスキンシップを十分にとり、安心して遊び始める事ができるようにしている。

3 本時

(1) ねらい

- 全身で土粘土に触れて遊び、先生や友達と楽しく過ごす。

(健康2-(4))

- (年少組) ・ 土粘土の匂いや感触、色に気付く。
- ・ 手や足などを使って粘土の感触を楽しむ。
- ・ ちぎったり、丸めたり、ひもを作ったりして単純な形（ダンゴ、ヘビなど）を作る。

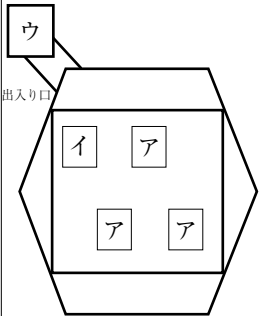
- (年少少組) ・ 手や足などを使って粘土の感触を楽しむ。
- ・ つまんだり、たたいたりする事で粘土が自由に変わる事に気付く。
- ・ ちぎったり、こねたり、穴をあけるなどして粘土をいじる。
- ・ 教師や周りの友達の真似をして、ちぎった粘土を丸めたり、ひもを作ったりする。

(2) 活動について

- *2段落目までは、年長組の内容と同様。続きは以下の内容である。

今回、幼児は初めて土粘土に触れるが、油粘土とは違う土粘土特有の感触を味わったり、匂いがない事にも気付いたりする中で、これまで以上に粘土に興味をもち、土粘土の面白さを知る事ができるだろう。また、普段は一人約500g程度の油粘土で遊んでいるが、一人約3kgの粘土を準備することで、手だけではなくダイナミックに全身で土粘土の感触を楽しみ、土粘土特有の性質に喜んだり、大きな物を作ったりする姿も期待したい。また、粘土は一人でもじっくりと様々な遊び方をすることもできるが、友達の作品に目を向け刺激を受けたり、友達と感触や面白さを共感したりすることもできるため、個々でじっくり遊ぶだけでなく、友達の作品に目を向け真似たり、友達と一緒に同じ作品を作ったりする姿も期待できるであろう。

(3) 本日の展開

環境の構成	時間	予想される幼児の活動	教師の援助
<p><保育室></p>  <p><準備物> *年長組の内容と同様</p>	<p>10:20</p>	<p>○ 汚れても良い服に着替える。</p> <p>○ 上靴・靴下を脱いでクラスごとに座る。</p> <p>○ 先生の周りに集まり、今日の活動について話を聞く。</p> <p>◎ 土粘土で遊ぼう。</p> <p>○ 設定している土粘土を見る。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-top: 20px;"> <p>○ 粘土に触れる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 表面に触る。 ・ 指で押す。 ・ 手で握る。 ・ 匂いをかぐ。 ・ 足で踏む。 ・ 手でたたく。 <p style="text-align: right;">など。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-top: 20px;"> <p>○ 粘土で遊ぶ。</p> <p>「年少少」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ つかむ。 ・ ちぎる。 ・ 伸ばす。 ・ 穴をあける。 ・ 転がす。 ・ 丸める。 ・ ひもにする。 <p>「年少」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 丸める。 ・ ひもにする。 ・ くっつける。 ・ つなげる。 ・ 塊を積み重ねる。 ・ 好きな形を作る。 ・ 体に付ける。 ・ 友達の作品を見る。 <p style="text-align: right;">など。</p> </div>	<p>○ 全身を使って伸び伸びと遊ぶ事ができるように汚れても良い服に着替える。</p> <p>○ 話し方や話す際の表情などを工夫し、これからの活動への期待を高める事ができるようにする。</p> <p>○ 安全に楽しく遊ぶことができるように、活動を始める前に約束事を分かりやすく伝える。</p> <p>○ 幼児が安全に伸び伸びと粘土遊ぶができるよう、床にシルバーシートを敷いたり、適切な量や柔らかさの粘土を準備したりする。</p> <p>○ 保育室に設定してある粘土を見てこれから始まる活動への期待を十分に高めることができるように、初めて見る土粘土への喜びに教師も共感する。</p> <p>○ 全員で一斉に土粘土に触れ、粘土の感触や匂い、冷たさなどを十分に味わう事ができるように、教師も幼児の気付きを十分に受け止め共感する。</p> <p>○ 土粘土の感触や匂いなどに気付けるように、幼児の気付きを周りの幼児にも紹介する。(年少)</p> <p>○ 土粘土の柔らかさや冷たさなどの心地良さや形を変える楽しさを十分に味わえるように、教師が率先して全身を使い土粘土に触れ楽しさを伝える。</p> <p>○ つかむ、ちぎる、丸めるなど様々な遊び方を楽しめるように、幼児の遊びを認めたり、教師も幼児と同じ遊び方で楽しんだりする。</p> <p>○ 普段の環境との違いなどから、粘土に触れる事へ抵抗を示す幼児へは、少しでも触れる事ができるように、幼児の様子を見守りながら誘い掛けたり、教師も一緒になって粘土に触れたりする。</p> <p>○ 土粘土で更に楽しく遊べるように、個々で遊び始める姿を見守り、様子に応じて教師も遊びに参加したり、新たな遊び方を提示したりする。</p> <p>○ 友達への興味を持つことができるように、幼児の作品を紹介したり友達の作品を真似て作る姿を友達の作品を真似て作ったりする姿を見守ったりする。</p> <p>○ 粘土の塊を積み重ねたり、並べたりなど、普段の粘土遊びではできないダイナミックな遊びも楽しむ事ができるように、幼児の遊びを広げるような言葉を掛ける。</p>

幼児期の土粘土による粘土遊び

	11:20	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教師の話聞く。 ・ 活動を振り返る。 ・ 友達の作品に目を向ける。 ○ 粘土を片付ける。 ○ 手や足を洗う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 沢山遊んだ達成感を味わえるように、片付けも幼児と一緒にやる。 ○ 活動を振り返る際は、満足感を十分に味わう事ができるように、幼児から、土粘土の感触や匂いや、どのような物を作ったかなどを引き出しながら話をする。
--	-------	--	---

3. 結果および考察

実践の結果を踏まえ、これまでの子どもの姿を把握している各担任の考察を踏まえて明らかにしていく。以下の各項目に対し、まずは各担任等の主な考察を列記し、その後筆者らのまとめを記入。○は良い点で、●は反省や改善点である。

1) 「ねらい」について

【年長組】

- 1 事前に油粘土についての振り返りを行っていたため、子どもたちなりに油粘土よりもやわらかい事や、色が違う事、においがしない事など土粘土の性質にも気付くことができていた。
- 2 個人差はあったが、手を使って丸めたり、伸ばしたりして遊ぶ姿や、足を使って粘土を踏んで感触を楽しむ姿、寝転がったり座ったりして遊ぶ姿など全身で触れながら楽しく過ごす事ができていた。
- 3 初めは少し抵抗を示す幼児もいたが、時間がたつにつれ、それぞれのペースで粘土に触れ、様々な遊びを楽しむ事ができていた。

【年中組】

- 4 土粘土に触れて遊ぶ事については、土粘土のぬるぬるした感触を楽しんだり、「冷たい」との言葉が沢山出たり、粘土を持ったり、粘土をはがしたりした際には、「重たい」の言葉が聞かれたりと、土粘土の様々な事に気付いていたようだった。
- 1 土粘土の匂いや色については、土粘土ということで子ども達も予想をしていたが、意図していない言葉が聞かれたり、もう少し子ども達が落ち着いて粘土を見たり、匂いに気付いたりすることができるよよかった。
- 5 手でこねたり、回したり、伸ばしたり、叩いたりして、粘土の感触を楽しみながら粘土の形が変わる面白さを味わっていた。また、足で踏んだり 足で伸ばしたりと体全身で土粘土に触れることができた。
- 6 始めは団子作り→ケーキ・ピザ・ヘビ・お好み焼き→船・顔・魚 など、少しずつ作るものも変わり、形を作っていた。
- 7 油粘土よりも大きく、また大きな塊同士を組み合わせる遊びも見られた為、よかった。
- 8 粘土を嫌がる幼児もおらず、楽しく過ごすことができていた。また、粘土で遊んだあとの手にも気付く事ができ、面白さを感じていた。

【年少組】

- 9 油粘土とは違って足や体を使って遊ぶことが出来、子どもたちも土粘土の感触を楽しんでいた。
- 10 油粘土の匂いが苦手だった幼児が土粘土では集中して遊んでいた。その後も油粘土で遊ぶようになったので粘土の面白さを感じていたようなので良かった。
- 2 週報で保護者に知らせていたので、土粘土で遊ぶことを事前知っている幼児が多くいた。全員が同じ気持ちで土粘土遊びができるよう、子どもたちに知らせないほうが良かった。

【年少少組】

- 11 最初は戸惑いながらも少しずつ土粘土に触れ始め、粘土の感触を楽しんでいた。初めは大きな粘土の山から少しずつつまんで取り、丸める事を楽しんでいたが徐々にちぎった粘土をくっつけたり、平たく伸ばしたりと粘土の形が自在に変わる事を楽しむ姿が沢山見られた。
- 3 教師が足で粘土を踏んだり、大きな粘土の塊を粘土の山から取ってみたりとダイナミックな活動をして見せても見ているだけで、自ら行う様子があまり見られなかった。

- 4 最初の導入や最後の振り返りなど、2年次一緒の活動だったので、振り返りが難しかった。年少組にとっては、これまで遊んできた粘土との違いや、普段よりダイナミックに遊んだ事などの話が必要で、年少少組の幼児にとっては初めて触れた粘土の心地よさや面白さなどの振り返りが必要だと思った。

以上の通り、多少の反省点（●-1,2）はあるものの、いずれのクラスにおいても指導案のねらいを十分に達成でき、意義のある活動であった。はじめの年長組は、しばらくの間、粘土に恐る恐る関わり、素材の感触や柔らかさなどを確かめていた。徐々に活発な展開となり、体全体でダイナミックに楽しむ姿（図1, 2）や、子どもらしい生き生きとした表現（図3, 4, 5）が見られた。最終的には大きな作品づくり（図6, 7）や共同遊び（図8, 9）につながり、存分に満喫したようであった。

次の年中・年少組においては、開始時から積極的な取り組みであった。土粘土の触感を体全体で楽しみながらも、普段とは異なる粘土遊びに夢中になる姿が見受けられた（図10, 11, 12）。その中で、特に注目すべき点（○-9）は、油粘土を苦手とする年少組の幼児が集中して取り組み、その後は油粘土に対する気持ちが前向きになったことである。このことは、あくまでも一部の結果ではあるが、油粘土に偏りがちになる幼児期の粘土遊びにおいて、「土粘土による粘土遊び」の有効性を示しているであろう。



図1 飛び跳ねて遊ぶ姿



図2 転がして遊ぶ姿



図3 くま



図4 ホットケーキとフォーク



図5 お面



図6 大きな作品づくりの様子



図7 リボンの付いたスカイツリー



図8 遊園地



図9 迷路



図10 たくさんのダンゴづくりの様子



図11 粘土の大きな塊で力強く遊ぶ姿



図12 共同で粘土遊びする様子

2) 環境構成について

【年長組】

- 5 シートの大きさは遊びにはちょうど良い広さだったが、遊びに夢中になるにつれシートの外に出て遊んだり、シートと床の境目で遊ぶ姿が見られたりした。その後の片付けの事も考え、もう少しシートを広くするか遊ぶ場所を再度しっかり伝えるべきだった。
- 6 リズム室に入ってすぐに粘土の山に気付き、とても喜んでた。しかし、山の土台にしていた中のバケツの方が気になり、粘土よりもバケツへの関心が高まってしまった。また、その後もバケツの中に入ったり、バケツの上に乗ったりする幼児もいたため、早めにバケツを片付けるか、始めからバケツはなくても良かったのではないかと。
- 12 準備してあった土粘土は、子どもたちが自分たちでちぎって扱いやすい柔らかさであった。また量についても、全員が満足して遊ぶ事ができるほどの適切な量であった。

【年中組】

- 7 土粘土の量を多く見せる為にバケツが粘土の内側にあった。バケツに興味を持ちバケツの上に乗る幼児がいて危なかった。バケツはなくてもよかったのではないかと。
- 13 年長組の反省から、シートの周りについてを置いた。粘土遊びへ集中することができてよかった。
- 8 年中組には、粘土が少し固めだったのではないかと感じた。もう少し柔らかいと、ダイナミックに遊ぶ幼児も多くなったのではないかと。
- 9 年中組は、まだ友達と組み合わせて遊ぶ様子があまり見られず、初めての物では一人でじっくりと遊ぶことが多い実態の為、もう少し多くの土粘土があると一人一人が大きな作品を多く作る事もできたのではないかと思った。

【年少組】

- 10 粘土が固く子どもたちの力では、大きな塊からとることが難しかった。もう少し柔らかければ良かった。
- 14 活動時間もちょうど良かった。

【年少少組】

- 15 通常の保育と同じ部屋で安心して活動を行う事ができた。また、初めて見る土粘土が小さな物ではなく大きな粘土の塊だったので、活動への期待も膨らみ、どの幼児も笑顔で活動をする事ができた。
- 11 今回、年少組と合同で粘土遊びを行ったが、年少組の幼児の人数が多いうえ、ダイナミックに遊ぶ幼児が多く、年少少組の幼児が圧倒されている様子だった。
- 12 年少組の幼児は粘土の山から力いっぱい粘土の塊を取っていたが、年少少組の子どもたちにとっては少し粘土が固かったようだった。また体も小さいので、同じ粘土の山から粘土を取ることも難しそうな場面もあった。出来れば、事前に低い粘土の山を作っておいて、幼児が好きなように体全体で粘土に触れやすくすると良かったのではないかと。

環境設定については、一定の成果が得られたものの、色々な改善点も挙がった。まず粘土の柔らかさについてだが、年中組以下の幼児には固くて扱いづらいとのことであった(●-8.10.12)。筆者らの見解では、これ以上の柔らかさにする事は可能であるが、今度はべたべた手にくっついて作りにくい。むしろ、多少の固さは自然物特有の素材性と肯定的に捉え、その抵抗感を全身で受けつつも子どものエネルギーを引き出すような動機づけや展開の工夫を検討する必要があると考える。次に粘土の量についてだが、いずれの組においても一人当たり3キログラムで適切だったようだが、年中組のように必要な場合もあるので、今後は年齢に応じて別の準備も考えたほうがいだろう(●-9)。

粘土の設定に関して、土台となる内側のバケツが要らないという考え方も出た(●-6.7)。バケツに子どもの気が向いたことは残念であったが、筆者らは子どもたちが山のような粘土の塊を見たときの表情と、力強く立ち向かっていく姿は忘れたい。単純に、全てを粘土の塊にすればバケツはいらないのだが、幼児にとっては扱いきれない無駄な量になってしまう。どのような造形活動においても、素材に対する第一印象は大きな動機づけにつながるうえ、今回は一定の効果が認められるので、利用していく意味はあると考える。したがって、今後はバケツに対する教師の対応や片づけるタイミングを課題として考察していきたい。また関連して、年少少組の幼児にとっては粘土の山が高すぎて体全体でかかわりづらかったようだ。(●-12) そのため、解決策としては低い粘土の山を作ったりして、幼児が体全体で好きなように触れられるような環境づく

りを検討していかなければならないであろう。その他としては、シート周りに衝立を置くことが、適切な活動を促すうえで効果的であることがわかった。

3) 教師の援助について

【年長組】

- 13 予想以上になかなか遊び始められない幼児や、汚れる事を嫌がる幼児がいた。それぞれの幼児に合わせて援助をしたつもりだが、もう少し色々な様子を予想して援助を考えておくべきだったと感じた。
- 14 遊びの途中で様々な面白い遊びが見られたが、それを周りに紹介することがなかなかできなかった。もっと友達の商品に目を向け更に遊びが広がるようにするためにも、紹介するなどの援助をもっと取り入れるべきだった。
- 15 最後に子どもたちの作品を紹介しないまま片付けに入ろうとした。満足感を味わうためにも、流れをしっかりと考えるべきだった。
- 16 教師自身も土粘土に触れ、幼児と一緒に何かを作ったり、率先して全身で触れる姿を見せる事ができるように心がけた。もっと教師自身も粘土で様々な物が作れるように頑張りたいと思った。

【年中組】

- 16 リズム室に入ってから導入になった為、シートや粘土が気になり、話を聞いていない幼児への対応に追われた。粘土への期待をもう少し高められるような言葉かけの工夫をするべきであった。
- 16 振り返りの際に、粘土の特性や作った物には触れることができたのだが、どのように手足を使って、粘土の形が変わったかなどに触れて振り返りをすると、もっと粘土の特性を意識して気付くことができたのではないかと感じた。
- 17 子ども達と一緒に粘土の感触を楽しんだり、作ったりするなどして共感することができたが、もっと具体的なものを作ればよかったのではないかと感じた。

【年少組】

- 17 土粘土の感触や匂いに気付くことが出来るような言葉を掛けることができた。
- 18 油粘土ではできない活動を教師が積極的に行ったため、幼児も真似て足で粘土を踏んだり、靴を作ったりしていたので良かった。
- 18 遊んでいくうちに手が白くなっていることを訴える幼児がいた。そこで教師が乾いたものが土であることに気付くことが出来るような言葉を掛けると良かった。

【年少少組】

- 19 年少組との合同の粘土遊びだったので、自分のクラスより年少組のクラスの子どもたちが作った作品を持って来たり、教師が行った遊びを真似て見せに来てくれたりした。さらに年少少組の子どもたちと一緒にじっくり粘土に触れたり、幼児と粘土の面白さを共感したりする為に、年少少組のみで粘土遊びをしてみたいと思った。
- 20 ほとんどの幼児が手のみで粘土に触れていた。その為、教師が粘土の山に座って見せたり、足で踏んで見せたりした。その後、粘土の山が大きかったので教師が抱き上げ、粘土の山に座らせてあげたり、踏ませてあげたりした。

ここでは多くの改善点が挙がっているが、まず取り上げたいのは●-17の「もっと具体的なものを作ればよかったのではないか」である。本活動について、改めて確認すべきことは、粘土遊びのねらいと内容についてである。全ての子どもたちにとって、土粘土は初体験であることから、素材に慣れ親しむことが第一のねらいである。そのため、教師も具体的なものをつくることは次の段階として捉え、素材の特性や触感などに気付かせるような援助に重点を置いてよい。一見、具体的なものが出来上がっていないと成果が出ていないように感じられるが、このような素材体験にしっかりと取り組むことが大事で、必ず通常の油粘土による粘土遊びや他の造形表現にも生きてくるものであろう。したがって、その他の細かい課題については今後の実践研究で改善していかなければならないが、総体的には適切な援助であったと考える。

それ以外では、年少と年少少組における粘土遊びについてである。人数的に都合が良かったことから合同で取り組んだものの、結果的には様々な支障が出た(●-4.11.19)。前項の環境設定においては、年少少組の幼児が年少組の活動を見て圧倒されてしまったことや、本項目では教師側が発達に応じた対応に集中できない結果などとなった。このようなことから、次

回からは少数であっても各組で実施すべきことがわかった。

4) 「土粘土による粘土遊び」についての感想

【年長組】

- 19 幼児がこれまで経験してきた粘土遊びでは、それぞれが個々で小さな作品を作る事が主で、なかなかイメージを膨らませて大きな作品を作る事が出来なかったので、今回友達と共同で大きな作品を製作することはできないのではないかと考えていたが、時間がたつにつれ土粘土の感触にも慣れ、何かテーマを決めて作品を作る姿が見られたり、友達同士で一つの作品を作ったりする姿が見られるようになった。粘土の種類や量、遊びの場が変わる事で、普段の粘土遊びでは見られない様々な遊びが見られ、子どもたちの創造力の凄さを改めて感じる事ができた。
- 20 今回、教師自身も初めて土粘土に触れて遊んだが、また機会があれば保育に取り入れ、子どもたちと遊んでいきたいと感じた。

【年中組】

- 21 今回、初めて土粘土に触れて遊ぶ中で、遊び方や作る物で油粘土と似ている所があった。また、油粘土とは違う、ダイナミックに遊ぶ幼児の姿も見られて今後繰り返して遊ぶと、更に発展した遊びや今回気付かなかった事も見えてくるのではないかと感じた。

【年少組】

- 22 初めて土粘土で遊んでみて、ほとんどの子どもたちが最後まで集中して遊んでいたので、何度か経験するともっと遊びが発展していくのではないかと思った。

【年少少組】

- 23 伸び伸び粘土遊びを楽しむ為にも、それぞれの年次で粘土遊びをしてみたいと思った。
- 24 約1時間近く活動を行ったが、最後まで粘土の形を変えながら楽しく活動する事ができた。
- 25 粘土を口に入れないかが心配だったが、口に入れる幼児はいなかった。

以上のように、全ての組からは本活動の良さを実感したうえで、次への前向きな意見が得られた。指導する側も、はじめての経験で手探りの部分もあったかと思うが、子どもたちと最後まで楽しみながら取り組み、有意義な活動であったことが確認できた。このことは、出来上がった作品や粘土遊びの様子(図13,14,15,16)から見て取れるだけでなく、何よりも活動後の子どもたちの満足げな表情から感じとることができた。



図13 年少児が全身で粘土を感じる様子



図14 年少児が大きな塊で粘土遊びする様子



図15 年少児が粘土で足を埋めて遊ぶ様子



図16 年中組の粘土遊びの様子

4. 結論

本研究を通して、おおよそ以下のように、幼児期の「土粘土による粘土遊び」の教育的意義が明らかとなった。

- ◎ 自然素材である土粘土の触感や可塑性を味わえる。
- ◎ 土粘土の良さを体感することで、粘土遊びに対する意識の変化をもたらす。
- ◎ 幼児の持つエネルギーを引き出し、全身によるダイナミックな粘土遊びを促す。
- ◎ つくる意欲が湧き、塊を活かした作品づくりにつながる。

これらについては、年長から年少組までの共通の内容である。そのうえで、年長組においては、◎共同遊びが展開されて周囲とのコミュニケーションを深められる、ことが付け加えられる。

他方、年少組においては次の意義が明確になった。

- ◎ 自然素材である土粘土の触感や可塑性を味わえる。
- ◎ 全身による意欲的な粘土遊びを促す。

この年少組に関しては、既述の様々な課題を踏まえたうえで今回の実践をすることも意味があるのかもしれないが、もう少しコンパクトでいだろう。全身で関わるような活動を目指すものの、身体の発達段階を踏まえると、ダイナミックな活動はまだ早い。粘土の量を減らし、狭いスペースで取り組める活動内容を検討していくべきだと考える。

今回は全ての組において、製作課題を設けない粘土遊びに取り組んだが、子どもたちは思っていたよりも夢中になって取り組んだ。幼児期において、自由な粘土遊びは効果的であることが明確になったと同時に、このような活動を通じて、子どもは楽しみながら基礎的な粘土の扱い方を身に付け、やがては自己のイメージを投影した豊かな表現へと結びついていくと考える。

この度の検証によって、幼児期における「土粘土による粘土遊び」の在り方と、その有効性を確認できた。更に、主体的な粘土遊びに導くための支援や環境設定について、様々な結果を得た。良かった部分は取り入れ、見えた課題は改善し、今後は、各年齢児における「土粘土による粘土遊び」を実践研究し、発達に応じた粘土遊びの在り方を掘り下げていきたい。

謝辞

本研究にあたり、ご協力していただいた附属なでしこ幼稚園の園長をはじめ、関係の先生方には心より感謝申し上げます。

註

- 1) 井上周一郎「粘土の造形表現活動に関する考察－短期大学生に対する実態調査を通して－」鹿兒島女子短期大学紀要第49号、p61、参照
- 2) 中川織江著「粘土遊びの心理学」風間書房2005、p82～83、参照
- 3) 同上、p84～86、参照

参考・引用文献

- 1) 中川織江著「粘土遊びの心理学」風間書房2005
- 2) 監修者・木下繁 淀井敏夫「塑造」開隆堂出版株式会社1976
- 3) 神谷睦代著「幼児の基礎造形 - 基礎的な技能の習得及び題材 (テーマ) についての実践と検証 -」美術科教育学会誌第30号

(平成28年1月20日 受理)